現地の人々から学び、ともに歩みながら、
現場と政策をつなぐような役割を担うことを目指す助産師

髙野　友花

たかの　ともか

国際医療協力局
人材開発部・研修課
助産師

★略　歴

2012年　看護師・助産師・保健師免許取得
2012年　横浜市立みなと赤十字病院に助産師・看護師として勤務
2016年　青年海外協力隊の助産師隊員として2年間モロッコ王国へ
2018年　大学の非常勤教員として助産・リプロダクティブヘルスの実習指導
国際医療協力局の国際保健医療協力研修
（現：グローバルヘルス・フィールドトレーニング）に参加
2019年　葛飾赤十字産院（現：東京かつしか赤十字母子医療センター）に助産師として勤務
2020年　長崎大学熱帯医学研究所　熱帯医学研修に参加しディプロマ取得
2022年　リバプール熱帯医学校にて国際公衆衛生学修士号取得
2022年　10月より国際医療協力局へ看護職として入局

★現在の主な担当業務

・JICA国別研修：医師及び看護師の卒後研修強化プロジェクト
・JICA国別研修：JICAセネガル母子保健サービス改善プロジェクトフェーズ3
・NCGMグローバルヘルスベーシックコース研修、アドバンストコース研修
・仏語圏アフリカ、アジアでの保健人材・保健システムに関する研究
・JICAセネガル母子保健サービス改善プロジェクトフェーズ3短期専門家
・ライフコースヘルスチーム

髙野さんが、医療職・国際協力を目指したきっかけを教えて下さい。

中学生の時に国境なき医師団の本を読み、日本の生活の中では想像もつかなかった紛争地や開発途上国の状況に衝撃を受けました。生まれた場所でこんなにも生活が違うのか、不平等だなと感じたことを、今でもよく覚えています。それと同時に、限られた資源の中で命と向き合い、活動をされていた国境なき医師団の方々の仕事に感銘を受けました。それがきっかけで国際協力について興味を持ち、積極的に知っていくうちに、開発途上国の人々に携わる仕事をしたいという思いを抱くようになりました。

人と関わることが好きだったこともあり、自分自身も現場で医療者として国際協力に携わりたいという思いから、助産師になりました。

国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積まれていたんですか。

大学を卒業した後、まずは助産師としての基本的な能力を身に着けたいと思い、病院に就職しました。産婦人科病棟だったので、周産期だけではなく、婦人科疾患の患者さんを担当させていただくことも多くありました。命の誕生に立ち会わせていただく日もあれば、癌で闘病されている患者さんの痛みに寄り添う、そんな様々な経験をさせていただきました。この経験を通じて、周産期だけでなく女性の一生の健康について学び、考える機会を得ました。臨床で合計4年間働きましたが、そのうちの1年間(3年目)は循環器内科病棟で看護師として勤務しました。国際協力に携わるには、産婦人科だけでなく、男性や高齢者も含むより広い対象の人々に対する看護ケアの経験が重要になると思ったためです。入職して3年目に循環器内科病棟に移動し、再び一から勉強をはじめ、看護師として働くことは大変ではありましたが、産婦人科にいてはできなかった経験、学びを多く得ることができました。また、後になって振り返ってみると、国際協力をする上でも重要な、新しい環境に適応する能力を身に着ける機会となり、新しいことに挑戦する際の自信になったと考えます。

助産師としての臨床経験を積む傍ら、途上国での短期ボランティアや国内での外国人を対象としたボランティア、セミナーや勉強会への参加を通して国際協力へ携わるための道を探りました。短期ボランティアは現場を知る良い機会であり、実際に現場へ行くことの大切さを学びましたが、短期間では現場で起きていることや現地のニーズが分からず、長期的に関わってみたいと感じるようになりました。そのため、開発途上国の現状について深く学ぶために、青年海外協力隊に参加しました。

赴任国のモロッコ王国では、助産師の初代隊員として保健省に配属され、2年間活動を行いました。保健省の母子保健担当者とともに保健センターでの母親学級の普及・定着のための研修運営や巡回指導、5S（「整理」「整頓」「清掃」「清潔」「躾（しつけ）」）の導入を行いました。この他には、学校での若年層への母子保健啓発活動、高等医療人材養成校での助産学生への母親学級についての研修開催等、医療の質改善・人材育成に関わる活動を実施しました。また、現地の人々の生活を深く学ぶ機会を得ることができ現地の人々の目線で物事を捉えること、現地の文化や考え方を理解し尊重することが関係性構築や活動を進めていくにあたりとても重要であることを学びました。

モロッコの高等医療人材養成校での講義の様子

モロッコでの活動の最終報告会でカウンターパートの助産師さんと
カウンターパートは日本のゆかたを
私はモロッコの伝統を衣装をまとって

協力隊の経験を経て、私は国際協力において自分自身が医療を提供するのではなく、現地の人々がオーナーシップを持ち、自分達で行えるように支援を行う開発分野に強い関心があるのだと気づきました。

しかしその一方で、課題と感じることがあってもそのアプローチ方法が分からずに困ったことや、現場が第一と思っていましたが、現場で起こっていることは国の政策や保健システムに大きく影響を受けていること、国の政策と現場の状況にはギャップがあることを学びました。国際協力分野で今後も働いていくには、知識や経験が不足しており、情報収集や計画立案、実践方法、研究や政策について学ぶ必要があると感じ、大学院進学を決意しました。

イギリスの大学院ではリプロダクティブヘルスを主とした国際公衆衛生コースを専攻し、疫学や統計、エビデンスの政策への活かし方、計画立案や評価のための手法に関して理解を深めました。新型コロナウイルスのパンデミックにより、イギリスでもまだ制約がある中での渡航だったので不安もありましたが、滞在中に制約はなくなり、授業もほとんど対面で受けることができました。修士論文のための研究では、マラウイ共和国に渡航する機会にも恵まれ、インタビュー調査を通して、研究の実践経験を得ることもできました。様々な背景を持つ教授陣やクラスメイトとの交流から学ぶことも多く、それぞれの文化や価値観を理解する重要性を再認識しました。それと同時に、私は現場と政策を繋ぎ、現地の状況に沿った、現地の人々が主役であるような国際協力を行っていきたいと改めて思いました。

イギリスの大学院の同級生達と

国際医療協力局に入局したきっかけ、理由を教えて下さい。

協力隊の経験を経て、現場と政策をつなぐ役割を担いたいと思い、何をしたらそれを実現できるのかとずっと考えていました。なかなかこれだという答えはなかったものの、現場でのプロジェクト運営ができ、かつ研究や政策に関わることができるということが理想的なのではと思うようになりました。しかし、現実的にはそのどれをも満たす職場はなかなかないように思えました。

国際医療協力局には以前から関心があり、単発のセミナーに参加したり、2018年に国際保健医療協力研修（現：グローバルヘルス・フィールドトレーニング）に参加したりしていました。勤務してみたいと思っていたものの、なかなか募集がなく、応募には至っていませんでした。

しかし、大学院の修士課程も終盤にかかり、就職先について考えていた際に、たまたま募集がありました。改めてホームページを見てみると、国際医療協力局の重点テーマと私が強く関心を持っている分野には重なりがあり、政策や研究に携わりながら、現場にも訪問し活動することができると分かり、私が担いたいと考えていた政策と現場を繋ぐ役割に近いのではないかと思いました。また、研修や局員キャリアパスを通して、局員の方々の様々なご経験や魅力的なお人柄に惹かれ、このような方々と一緒に働き、学ばせていただきながら、国際協力に必要な力を身に着けていきたいと思いました。

現在は入局して7か月程度経過しましたが、国際会議や研究でのアジアやアフリカへの渡航の機会に恵まれました。研究はどちらも保健人材に関するもので、これまで国際医療協力局との関連がある国で、その国の人も交えながら、今現場にある課題の解決につながる研究を実施しています。新しく学ぶこと、経験させていただくこと、局員の方々から学ばせていただくことも多く、新しい発見と成長を得ることのできる日々を過ごしています。

大学院の研究で訪れたマラウイで、研究チームメンバーと

今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

これまでの経験を通して、開発途上国に貢献したいと思い現場に行く一方で、開発途上国の人々から生き方、人間関係のあり方等、新たな気づきを得る機会もとても多かったと感じています。異なる文化・価値観との出会いによりお互い学び合える点が国際協力の魅力のひとつだと考えます。開発途上国の人々から学ぶ気持ちを忘れずに、現地の文化や習慣を尊重し、現地の人とともに歩みながら、現場と政策をつなぐ役割を担えるような人材になれればと思っています。そのためには、今担当させていただいている研修運営や短期専門家の業務等から実務経験を積み、さらに研究にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

また、リプロダクティブヘルス・ライツの分野は、日本国内において課題が多い分野であると考えます。そのため、様々な国で得た知識と経験を日本へフィードバックし、日本のリプロダクティブヘルス・ライツ分野の発展にも寄与することができればと考えています。

入局後、研究で訪れたセネガルの看護師助産師養成校にて

最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

国際医療協力の世界に明確なキャリアパスはなく、どのような道に進んでいったら良いのかと迷われる方も多いのではと思います。また、国際医療協力自体、どのような意味があるのかと分からなくなることもあるのではないでしょうか。私自身も自分がやっていることに意味があるのかと悩みますし、今でもどのような道に進んでいくのが良いのか、ライフスタイルとどのようにバランスを取っていくのかと悩みます。

しかし、今回キャリアパスを書いていて、その時には意味があるか疑問であったことであっても、しっかりと次につながる機会になっていたのだなと実感することができました。この道に進めばいいという正解のようなものはなく、自分の選択を自分自身でプラスに意味づけをしていくことが大切なのかなと思います。

また、迷った時にヒントをくれたのは、同じように国際医療協力を目指す仲間やその分野で活躍されている方々との会話からでした。国際医療協力の道は十人十色だと思うので、色んな人と話をしてヒントを得ながら、その時々の自分に合った選択をし、経験を積んでいくのが良いのではないでしょうか。

今はオンラインで様々な情報が得られる機会ではありますが、現場に行ってその土地の食べ物を食べ、においや空気を感じ、その土地の人々と触れ合うことはとても重要だと思います。
早い機会に一度、開発途上国に行ったり、その国で活動されている団体を訪れたりすることも、次の一歩につながる経験となるのではないでしょうか。

ありがとうございました。